



特集紹介（特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か：個人と社会をめぐる現代の議論から）

関西「言い訳」研究会

(Citation)

社会学雑誌, 40:3-8

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100486317>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486317>



特集紹介 社会学的説明か「社会学的言い訳」か

——個人と社会をめぐる現代の議論から——

関西「言い訳」研究会編

われわれが表向き装っているものこそ、われわれの実体にはかならない。だから、われわれはなにのふりをするか、あらかじめ慎重に考えなくてはならない。

(Vonnegut, 1966: v = 二〇一三: 三)

もし、ここにひとりの兇暴きわるる殺人犯があらわれて、かれをそのような犯罪にみちびいたものが、広島で被爆したことへの絶望感にもとづくとしたなら。われわれの誰がこの犯罪者を正視する勇気をもつだろう? ……

あの、白血病で死んだ穏やかな青年が、もし、二年間の《夏休み》を、勤勉に働くことのかわりに、一個の犯罪者となってしまうとしたら、と空想してみるのは、われわれのぬくぬくとおさまっている心に、鋭いシヨックをあたえないではない。青年はス

トイックに働いて日々をおくり、かれの死につづいてすぐ後追い自殺するほどにもかれに深い印象をうけた恋人を得た。それこそが、まさに異様なほどにも、常識的な状態をこえた、ひとつの稀有の達成であったのだということ忘れてはならない。

この青年とその婚約者とは、かれらがもし狂気や犯罪や道徳的な顛落に到ったとしても、なおかつ人間らしいとしかいえない、そういう最も深く、にがい絶望をまのあたりにした人々である。しかし、かれらは屈伏せず、ストイックに、最後まで威厳とともに生き、沈黙して威厳ある死を選んだのであった。(大江、一九六五…一五六—七)

人文社会諸科学における「言語論的転回」以降、「言語の遂行的側面」ということがよく知られるようになって

た。¹⁾ 念のため例を挙げておけば、挨拶や約束はその典型である。「おはようございます」という言葉は必ずしも時刻の早さを示しておらず、「嘘ついたら針千本飲ます」と言われても本当に針千本飲まされる心配は（よほどの相手でないかぎり……）ない。そうした挨拶や約束の言葉を交わすこと自体に、一定の関係を形成したり確認したりするうえで意義がある。日常的にはさほど意識されないにしても、そうした習慣が成り立っている。

さらにその言語の遂行的側面は、何らかの言説の社会的な正当性をめぐる争いや、何らかの言説によって（再）構築される権力関係や対抗関係に即して、いつそう注目されることとなった（Butler, 1997 = 二〇〇四）。²⁾ いまでは、とりわけ女性やさまざまなマイノリティに対する、「ずるい言葉」（森山、二〇二〇）³⁾ や「呪いの言葉」（上西、二〇一九）⁴⁾ としても知られている。そうした正当性をめぐる争い、少なくともやりとりに関わる言葉として、本特集の主題に含まれる「言い訳」がある。

例えば誰かとの待ち合わせに遅れたとする。「ごめん、寝坊した」と「言い訳」にすらならない（かもしれない）が、「道路が混んでいてバスが遅れた」や「雨で電車が遅延した」といった言葉は、一方では正当な理由として受け入れてもらえるかもしれない。しかし他方では、「どうしてそれを見越してもっと早い時間に乗らなかったのか？」と咎めら

れるかもしれない。そのように遅れたせいで、これから参加する予定だったイベントの入場時刻や、海外に向かう飛行機の搭乗時刻に間に合わなかったとしたら、返す言葉はあまりない。

いずれにしても、正当な理由の説明か、それとも単に不当な言い訳かは、そこで発せられている言葉それ自体や、その言葉が指し示している事態によって一律に決められるものではなく、その言葉が発せられる場面や関係に大いに依存する。⁵⁾ そしてその言葉が「言い訳」と見なされた場合にも、あるいは「言い訳」と見なされることを怖れて押し黙っている場合にも、それ相応の報いがありうる。さらに「社会学的言い訳」批判に即して言えば、一個人が対面する相手に「それは言い訳だ」と難ずることと（それはそれで深刻な場面でもありうるが）、立法府の一員が国民に向けて「それは言い訳だ」と言い放つこととは、まったく別の効果をもたらしうる。⁶⁾

そして「社会学的言い訳」批判にはさらに、社会と言葉との、ひいては社会学と言葉との、根源的とも言つてよい結びつきが関わっている。それはつまり、社会が個人の意識や身体と同じようなリアリティはもたないとしても、それでも「一種独特のリアリティ」（E・デュルケム）をもつとすれば、その「一種独特のリアリティ」を構成するものとは、社会をめぐる言葉を通して把握されるものであ

ることによる。もつと言えば、社会の「一種独特なりアリティ」とは、社会をめぐる言葉を通して構成されるものであり、社会をめぐる言葉もまた、社会のなかでのみ得られるものだからである。したがって、社会を論じるにあたって特権的な地点はどこにもなく、社会学はつねに社会から「学ば」側にある (Luhmann, 1997: 22 = 二〇〇九・九)。

なおかつ「知識の存在被拘束性」(K・マンハイム)と言われるように、いくら他の視点をを用いれば他の見え方がするといっても、われわれにとって社会の切り取り方はそのまま社会のあり方であり、何らかの視点によって切り取られる以前の社会というものは存在しない。少なくともそのようなものを、われわれには捉えようがない。しかしそこで単に「見え方は人それぞれ」と言い切ってしまうと、他ならぬマンハイムにも寄せられた「何でもあり」の相対主義の疑念が生じ、二〇世紀前半にはすでに「世界観戦争」という言説が生まれ、二〇世紀後半には「歴史修正主義」の論争が引き起こされている。つまりそもそも社会の切り取り方あるいは見え方に、個人の独創によるものはほとんど存在せず、そしてまさに言語の遂行的側面と同じく、社会の切り取り方あるいは見え方が影響を与えるのは、単にその社会の切り取り方あるいは見え方だけにとどまらない。

「語る」と「騙る」は紙一重、とはよく言われること

あるが、そもそも社会を十全に語る言葉などありはしない。しかし現にいま、これほど多くの人が社会について語り、あるいは騙っている。そうである以上、社会を扱う学としての社会学は、いよいよ社会学の看板を下ろさないかぎり、社会について語り続けていくより他はない。

* * *

以下、本特集の各論考について紹介しておく。

第一論文「社会学の言い訳」批判とはいかなる批判か——社会学的帰属の観点から——(梅村麦生)では、二〇世紀末頃より社会学の外部から社会学に対してなされるようになった「社会学の言い訳」批判と呼ばれる言説について、その来歴と広がりを見たうえで、社会学的帰属をめぐる論争のなかに位置づけて検討をおこなっている。

第二論文「クリスチャン・スミスの社会学論——人格主義的社会理論のプロジェクト——」(池田直樹)では、いわばポスト社会構築主義の時代にあつて、社会構築主義の思想のもとで描かれてきたとする社会像に抗して、批判的実在論の構想に基づき特有の人格主義的な社会理論を提唱した米国の社会学者クリスチャン・スミスの社会学論を取り上げて、その意義について論じている。

第三論文「現代ドイツにおける「個人的な」宗教をめぐ

る社会学説史的展開——「個人化」と「私化」の概念についての議論を手がかりに——（畠中茉莉子）では、近代社会における宗教の世俗化、あるいは宗教的信仰の「個人化」や「私化」といった議論が普及した後の、いわばポスト世俗化論の時代におけるドイツの宗教社会学の議論について、それ以前の信仰の「個人化」や「私化」の主張にまで立ち戻り、その妥当性について検討をおこなっている。

第四論文「戦後知識人と「悔恨共同体」——財団法人『二十世紀研究所』と清水幾太郎、丸山眞男、福田恆存、林健太郎——」（松野靖子）では、第二次世界大戦後もない時期に設立され、丸山眞男の言う「悔恨共同体」の考えのもとで、知識人と市民、知識人と社会の新たな関係のあり方を模索した『二十世紀研究所』の試みを取り上げ、設立当初の各思想家たちの精神的態度の共有と、その後の思想的な分裂という相違に着目し、その活動の意義を検討している。

第五論文「「指摘」と「悪口」の境界——「お前はフェイクニュースだ」の成員カテゴリー化分析——」（若狭優）では、一方では単なる「指摘」と言われているものが、他方ではまぎれもなく「悪口」として寄与していることがありうるように、そうした「指摘」と「悪口」との境界がどこにあるのかを探る研究の一環として、米国のドナルド・トランプ前大統領の発言で有名になった「フェイク・ニュー

ス」を取り上げ、「お前はフェイクニュースだ」という発言がどのようにしてそこで名指している対象を「フェイク・ニュース」としてカテゴリー化しているのかを分析している。

第六論文「「社交性」の振幅と「影の形象」の基層性——一九二〇年代ドイツ語圏社会学界におけるジンメル社交性論の受容——」（田村豪）では、個人か社会かという二元論に与することなく社会学論を構想したものととして、あらためてゲオルク・ジンメルの社交性論を取り上げたいで、しかしそうしたいわば個人か社会かの択一に陥ることなく第三の道をとらんとする構想がいかに困難であるのかを、一九二〇年代の社会学界におけるジンメル社交性論の受容を踏まえて論じつつ、その意義を検討している。

第七論文「分業と連帯を可能にするもの——デュルケムにおける「正義」の位置——」（野々村元希）では、社会を一種独特のリアリティをもつものとして研究すべきことを説く一方で、近代社会における道徳的個人主義や人格崇拜の意義を説いたことで知られるエミール・デュルケムの社会学理論にあらためて着目し、その学説に見られる個人と社会とを、あるいは他者どうしをつなぐ理路について、連帯主義の議論に立ち返り、そこで求められている「正義」の意義を論じている。

以上、各論考で取り上げられている議論とその分析を踏

まえて、「個人的なもの」と「社会的なもの」との関わりという、社会学始まって以来の問題系についてあらためて考えるきっかけとなることを、本特集の執筆者一同望んでいる。

* * *

最後に、本特集を企画した関西「言い訳」研究会は、本特集の執筆者たちによって二〇二二年八月に発足し、社会学に対する今日の批判や、そうした批判と政治思想・宗教思想との関わりなどをテーマとして、定期的に研究会合を重ねてきた。また二〇二三年四月からは、科研費課題（基盤研究（C）「社会学的説明か、社会学的言い訳か——社会学的帰属理論の観点から」（研究代表者・梅村麦生、二三K〇一七四八））による助成を受けて、共同研究を実施している。したがって本特集全体も、その助成を受けた研究成果の一部である。

（本特集紹介執筆者・梅村）

註

（1）次段落に挙げる文献や例からもわかるように、言語の遂行的側面の研究は社会学のなかで特に構築主義の諸アプローチによって進められていった。その受容の一端と、より原理的な水準で

のコミュニケーション理論との結びつきを示す例として、中河（二〇〇一）や馬場（二〇〇一）も参照のこと。

（2）ごく一例として、森山（二〇二〇・一八一―二三）は「そんな言い方じゃ聞き入れてもらえないよ」という言葉を挙げ、「トーンポリシング」（言い方の取り締まり）の観点を交えて読み解いている。誰かに足を踏みつけられたとき、その足を振り払うのでもなく「その足をどけろ！」と言うのでもなく、「お願いしますから、その足をどけてくれませんか？」と言ってみたりと、その側がお願いする立場に立たされてしまおうとともに、その願いを聞き入れてもらえるかの保証もない。

（3）以下の註（4）の箇所にも記すように、「言い訳」という言辭は、「それは言い訳である」と言明する側と、「それは言い訳である」と言明される側とのあいだに、いわば〈道徳的な〉とも言える非対称性をもたらすが、「説明」もまた、「説明する側」と「説明される側」の非対称性をもたらすものである（後者については、説明の対象そのものになることと、説明を受ける相手になることとの双方を分けることができるが、ここではその点を置いておく）。例えば「マンスプレイニング」の語を普及させるきっかけとなったレベッカ・ソルニット「説教したがる男たち」はまさに、男性から女性への一見すると中立を装った「説明」ないし「説教」の背後に、そうした非対称性が覆い隠されていることを告発するものであった。その流れと同一に論じることができないが、「社会学的言い訳」批判やそれに類する言説も、学術的な説明がもたらす非対称性を、批判の対象にしていると考えられる（本特集の第一論文最終節で述べている、帰属概念の二次の構成主義的転回の議論も参照のこと）。ただし、

蛇足を厭わずに補足しておく、ポピュリズムや反エリート主義を標榜する政治家は、ポピュリズムや反エリート主義の主張によって、みずからが他ならぬ〈選良＝エリート〉であることを少なからず覆い隠す効果があるのと同様に、学術的な「説明」が非対称性をもたらしているとしても、その非対称性の批判そのものによって覆い隠される非対称性がありうる。

- (4) 自己責任論に関してもまったく同様である。「言い訳」や「自己責任」の言説がもつ遂行性の問題は、非対称的な関係のもとで先鋭化する。なお Bacevic (2021) は、「知識の遂行性」という観点から、「社会学的説明」が「社会学的言い訳＝免責」として現に寄与している可能性を社会学がこれまで注視してこなかったと指摘しているが、当然ながらここで述べたような「社会学的言い訳」批判そのものの遂行性を併せて考えなければならぬ。

- (5) 念のために付言しておく、「社会」の実在性の有無を別の水準で語る議論のために、この箇所の「社会」は「社会的なもの」と置き換えても構わない。以下同じ。

- (6) ここに引いた箇所ではルーマンは、社会「に教える」側ではなく、と付言している。ただしもちろん、社会の他の領域ではなく学術のなかで初めて提供される視点、というものはありうる。

文献

馬場靖雄、二〇〇一、「構成と現実／構成という現実」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版、四三一―五七。

Bacevic, Jana. 2021. "No Such Thing as Sociological Excuses? Performativity, Rationality and Social Scientific Expertise in Late Liberalism." *European Journal of Social Theory*, 24(3): 394-410, (二〇二三年七月七日取得 <https://doi.org/10.1177/13684310211018939>).

Butler, Judith P. 1997. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York: Routledge. (＝二〇〇四、竹村和子訳『触発する言葉——言語・権力・行為体』岩波書店)

Luhmann, Niklas. 1997. *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Erster Teilband, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (＝二〇〇九、馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会』一、法政大学出版局)

中河伸俊、二〇〇一、「Is Constructionism Here to Stay?——まえがきにかえて」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版、三一二―四。

大江健三郎、一九六五、「ヒロシマ・ノート」岩波書店。

Solnit, Rebecca. 2014. *Men Explain Things to Me*, Update edition with two new essays, Chicago, Illinois: Haymarket Books. (＝二〇一八、ハーン小路恭子訳『説教したがる男たち』左右社)

Yonigut, Kurt Jr. [1962] 1966. *Mother Night*, New York: Dell Publishing. (＝二一九八七)二〇二二、飛田茂雄訳『母なる夜』早川書房。